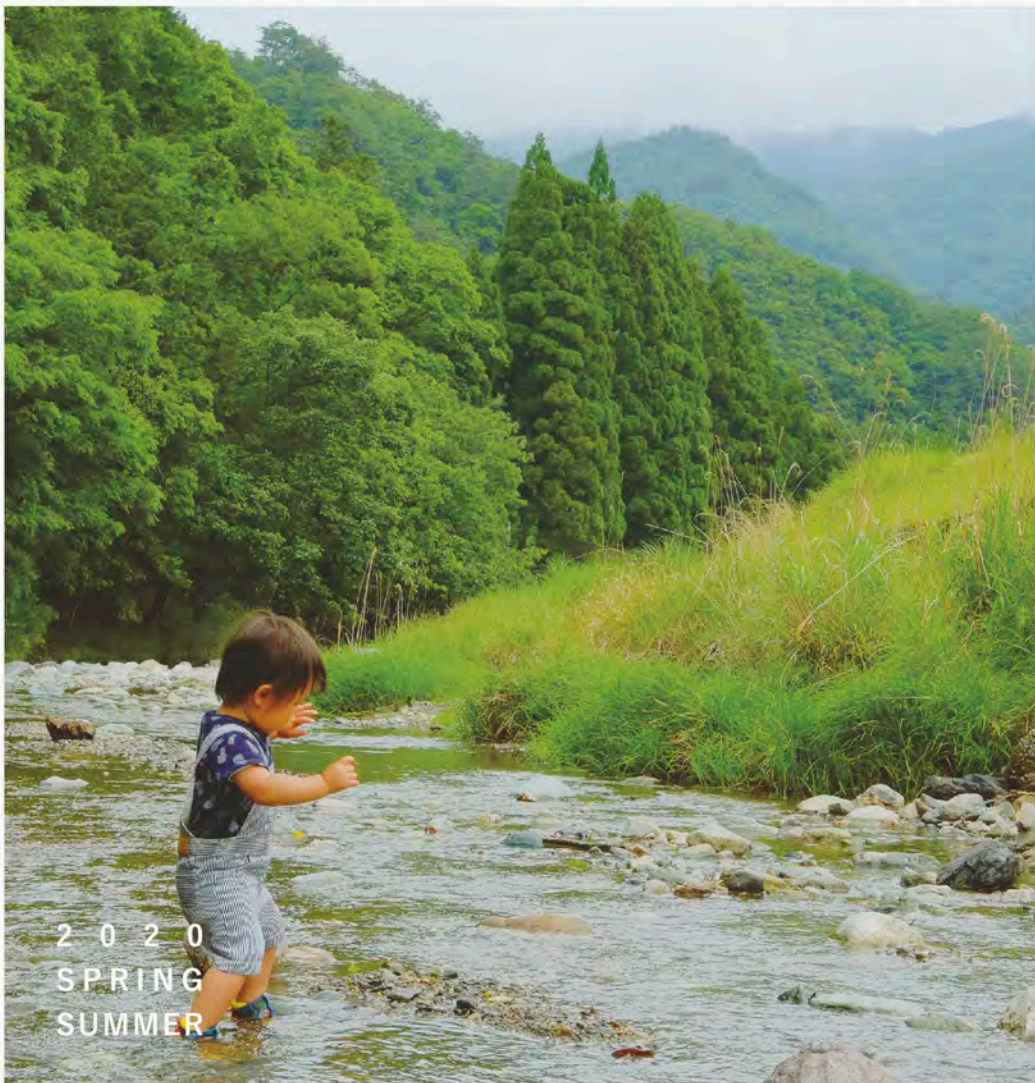


わ だ ち

株式会社 西村交益社
やまぶきカード会員情報誌

Vol.06



2020
SPRING
SUMMER

お葬儀のことから
その後のことまで
なんでもお気軽にご相談ください。

もしもの時は
24時間365日
日本全国どこからでも

☎ 0120-62-5909

公衆電話・携帯 対応



つるぎ会館

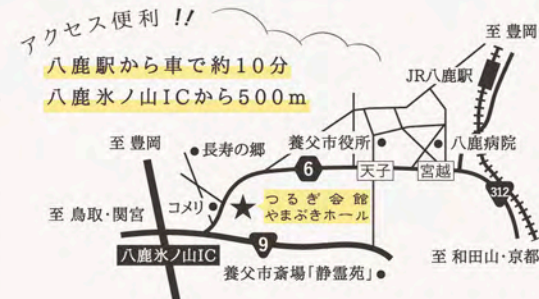
株式会社 西村交益社

ホールのご予約・お問い合わせは

☎ 0120-62-5909 [つるぎ会館]

〒667-0044 兵庫県養父市八鹿町国木133-1

www.koekisha.info



温泉にまつわるあれこれ
ローカルな温泉のススメ／「合格の湯」「シルク温泉」
ブラジル滞在記／密祐快
花とブルース／伊藤雄大
音楽室だより／中嶋由紀
おしえて戌亥先生
玩具博物館の窓から
協力店ショップガイド
インフォメーション

「わだち」に込めた思い

(株)西村交益社つるぎ会館

ある日、会館を訪ねて来られたご夫婦。
「自分達の葬儀の事を相談しておきたい」との事でした。
ご主人が困難な病気と闘っておられる事、二人の娘さんは、
それぞれ嫁がれて、遠くにお住まいであること・・・など、
ご事情をお聞きしてから
プランの内容や式の流れ、費用など提案しました。
話が終わり、コーヒーをお出しすると、
「よしっ、これで終(しま)いは、決めた。あとはこれからどう精一杯生きるか。
コーヒーが特別美味しく感じるわ。」とおっしゃいました。
そのことがずっと胸の奥にあり、当社にその「これからの人生」を
少しでもサポートできる事がないかとの思いから、会員カードを作ったのです。
まだまだ発展途上ではありますが、もっとお得で便利なカードにしていきたいと
思っております。

「わだち」は、車の通ったあとに残る車輪の跡の事です。
古代ローマ遺跡を旅した時、何千年も昔の馬車の跡がくっきりと残っていました。
会員の皆様が歩んでこられた、尊い人生がそこに重なるように思います。
会員情報誌の名前を「わだち」にしたのはその思いがあったからです。
「今日という日は、残りの人生の第一日目である」
私達のこの「わだち」が少しでもお役にたてることを願って。

温泉にまつわる

あれこれ



高齢者入浴アドバイザーの資格を取りました。初日の講義で「日本人は、生まれた直後に産湯につかり、八十歳まで生きるとして、約三万回お風呂に入り、最後は湯かんで締めくくる。お風呂大好き民族なのです。」と言われ、つくづく納得しました。

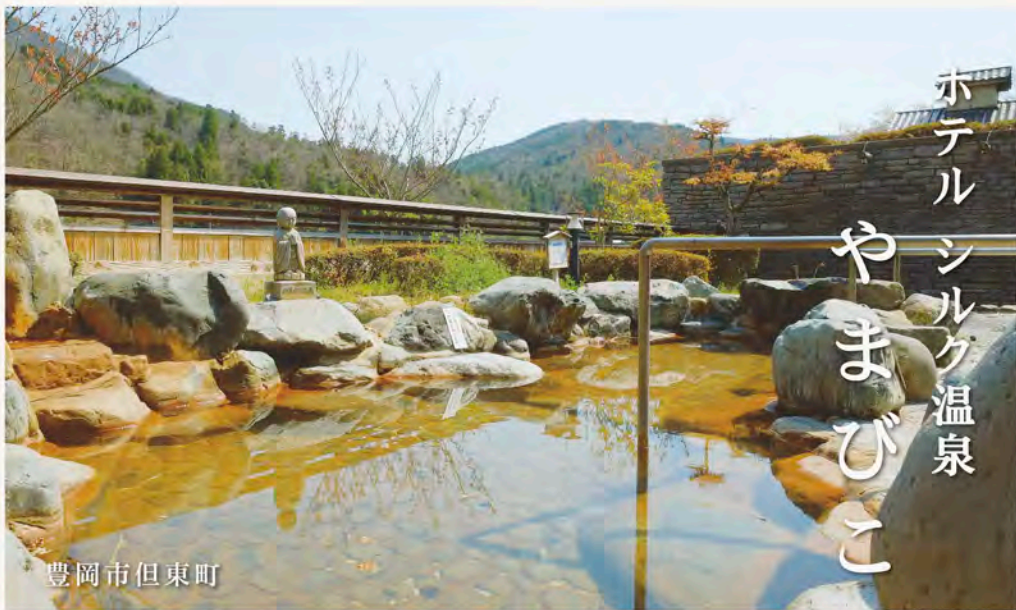
大学生時代、下宿の隣部屋は、アメリカ人でした。彼曰く「銭湯コワイデス。」「お湯が熱くてフカノウデス。」「全員ハダカシンジラレナイデス。」「宮大工になりたくて日本に来たというので「日本の文化を知らずにどうする!」と、銭湯に引っ張って行きました。半年もすると「銭湯サイコー!」と叫び、日本人の彼女が出来て、二人で福井県の温泉に旅するまでになりました。そして「日本のお風呂文化スバラシイデス。四季が、日本人を風呂好きにしたのデス。暑い時の風呂、サツパリスルネ。寒い時は、体の芯からアタタマル。銭湯は、コミュニケーションの場ネ。そして温泉は癒し、リラククスネ。ストレスどこか行っちゃうよ。」と、青い目で力説していました。

ローマ人が青い目だったかどうかは、知りませんが、映画にもなった、ヤマザキマリ漫画「テルマエ・ロマエ」をご存じですか？

古代ローマ時代の浴場と、現代日本の風呂をテーマとしたコメディで、入浴文化という共通のキーワードを軸にし、現代日本にタイムスリップした古代ローマ人の浴場設計技師が、日本の風呂文化にカルチャーショックを覚え、大真面目にリアクションをするのが面白い。主人公が見聞きした日本の風呂をローマに持ち帰り、時の宰相や皇帝に大絶賛され、出世します。また、十代からイタリヤに住んでいる作者、歴史的な描写も見事で、画も素晴らしく、腹の底から笑えます。

「縄文時代の遺跡に温泉成分が見つかった」記事を読んだことがあります。縄文人が地中から沸くお湯につかっていたとしたら、その歴史は、相当なものです。日本は、火山の国、その恵みともいえる温泉は、約三千もあるとか。調べていくと、その中には、「珍湯」もあります。「お尻が黒くなる」「サイダーのように泡が肌にくっつく」「不味い温泉」「湯の色が気候によって変わる」「真っ黒な温泉」「強烈に臭い」。かく言う私、風呂道具一式を風呂敷に包んで、車に積んでおります。(そういえば、風呂敷の語源は風呂です。)好機を逸せぬようにしたいと思っておりますので。





ホテルシルク温泉

やまびこ

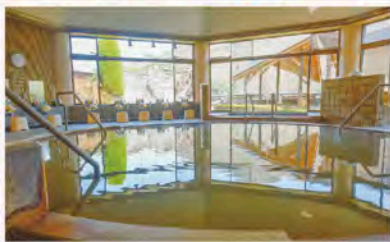
豊岡市但東町



合格の湯

天然温泉まんの湯

養父市三宅



ローカルな温泉のススメ



養父市には毎年スキーやアウトドアが好きな人がたくさん訪れる。そんな観光客が帰り道にふらっと立ち寄れる人気のローカルな温泉が「合格の湯」だ。山の風景が美しいこの温泉で、汗を流し、疲れた体を癒して帰路につくことが、定番となっている。

「合格の湯」という名の由来は、16年以上前に遡る。アトピー性皮膚炎に悩んでいた年頃の女性がこのお風呂を続けたことで症状が緩和し、それまで諦めていた就職で「合格」したからだとか。その云われから、今では館内にあるお社に合格祈願に訪れる学生も多くいるらしい。

泉質はナトリウム塩化物低温泉。神経痛・関節痛などにも良いと言われている。浸かった後はスベスベの肌が実感できる。

また、この場所にアットホームさを感じる人も多いだろう。地元の方が作った手作りのお土産や、特産物が販売されていたり、広々としたくろぎスペースがあったりと、つつい長居してしまいたいような温かい雰囲気がある。地元の方にも人気らしく、常連さんもたくさんいる。確かに近所にあったら毎日でも通いたくなる温泉だ。

豊岡市但東町の、のどかな田園風景と心地良い川沿いの道を車で進むと、ふとたどり着くのが「シルク温泉やまびこ」だ。

ミネラル豊富な蛇紋岩の境界から湧出した湯で、豊富な炭酸水素イオン成分によるクレンジング効果と、硫酸塩泉による保湿効果の両方を備えていて、美肌へ導く「魔法の湯」と言われている。そのことから、女性にも人気の温泉宿として知られている。確かにそのお湯に触れるだけでもトロっとした手触りを実感できる。源泉かけ流しのお風呂もあり、全身で浸かってみたいと思える温泉だった。日帰りでもこの温泉は利用できる。ドライブがてら楽しんでみてはいかがだろうか。

宿泊できるのもこの温泉の魅力だ。自然に囲まれた宿で、読書でもしながらゆっくり過ごすのも良さそうだ。また、この場所が豊岡の観光地である出石・城崎・京都の観光地・天橋立などのほぼ真ん中にあることから、宿泊しながら観光地を巡る方も多いという。日本海の海の幸、山の幸、絶品の但馬牛などのお料理を楽しむながら過ごす休日なんて、想像するだけでワクワクしてしまう。

シルク温泉 やまびこ

TEL.0796-54-0141

兵庫県豊岡市但東町正法寺165

新型コロナウイルスにおける
営業時間のご確認をお願いいたします。



合格の湯 天然温泉まんの湯

TEL.079-663-5556

〒667-1101兵庫県養父市三宅821

新型コロナウイルスにおける
営業時間のご確認をお願いいたします。



ブラジル滞在記

感染大国ブラジルの思い出

三年間の赴任期間が終わっても、毎年約一ヶ月の駐在にブラジルに渡っていたのですが、世界的なコロナウイルス蔓延の影響で「本山は、責任が持てないから中止にしてほしい。」と言われ、行けなくなりました。また、ブラジルのスザノ金剛寺の寺院員から連絡が入り、「スザノ市の市役所からお寺の閉鎖を通告されたので、四月中は業務停止にしている。」とのこと。五月になっても事態が終息しなければもう一ヶ月延期するとの事でした。つまり私が行っていたとしても、仕事がありません。街はシャッターを降ろし、開いているのはスーパーですが、土日を除く平日だけ。あと店を開けているのは、薬屋とパン屋だけだと聞きました。なんとという事態だろう。お葬式も法事も一切無しです。衛生的にも医療的にも脆弱な街でウイルスに感染したら大変です。いつもお寺にお参りにくる老人たちが、じっと耐えている姿が目に見えがびます。

私が赴任していた三年間は、結構毎日が忙しかったけれども、楽しい日々でした。こんな事態になったので、余計にその頃を思い出します。夕方五時にお寺の通用口の扉が閉ざされて、一日の業務が終わわり、多忙だった日には、職員達と一緒にレストランに行ったり、デリバリーのピザを頼んで一緒に食事をしたりしました。受付の女性が「先生、今夜は何が食べたいですか？」と必ず聞いてくる。雨の夜は「ピザにしようや。」というも答えていました。「またピザですか。ピザがそんなに好きなんですか？」と言われますが、そうじゃない。雨の中を外に出たくないだけ。でも本当は、街の中心に隣接して建っているショッピングセンターのフードコートにある Coração Mineiro (「ラソン ミネイロ」という店の味が大好きだった。店はバイキング形式で、好きなモノを大きめのお皿に取り込んでいく。

日本のそれと違うのは、最初に決められた額を払うのではなく、レジにある計りにお皿ごと乗せて、その重さで支払額が決まるのです。この形式を「quilo(キロ)」と言う。多分英語の「kilogram(キログラム)」の略語だろう。そしてそのあとで生ビールを発注すると、レジの娘は必ず「Pequeno(ペケニー)?」と聞くから「Nao Grande(ナオン グランジ)！」と首を横に振って答える。つまり、生ビールの器の大きさを聞いてくるのです。大小二種類のプラスチックのコップのどちらか。もちろん大きい方「Grande(グランジ)」を発注。支払いを終えて好きな席に座って食べます。日曜日はすごい数のテーブル席が並んだ広いコートの中のステージで、サンバやボサノバの生演奏をやっているけど、大音量で話も出来ない。コラソン ミネイロの隣はマクドナルド。少し離れてケンタッキーフライドチキン。若者たちが列をなしている。土日は、子供連れの



若い夫婦が多い。だから土日は、あまりここには来たくない。でも、子供たちは、外食が嬉しそうでした。そんなショッピングセンターも今は、感染防止のために閉鎖されていると聞きました。はしゃぐ子供たちの声もなく、ひっそりとしていることでしょう。ひと時の幸せさえも奪っていくコロナウイルス。いつになればあの歓喜が戻ってくるのでしょうか。目には見えないモノの恐ろしさをひしひしと感じます。考えてみれば「いのち」も「こころ」も「愛」も「神」や「仏」も、生きていく上で大切なモノばかりなのに誰もそれらを見たことが無い。もしかしたら、それらの裏側には恐ろしいモノが潜んでいるかもしれない。今のウイルス騒動は、人類が見えないモノの怖さを改めて知る機会となりました。『平和な世界』『安心な生活』を、経済主動の欲心と並列にして求める時代の到来となれば良いと思います。



高野山真言宗高照寺

花の寺の「花説法」は有名で、毎年訪れるファンも多い。
兵庫県養父市八鹿町高柳1156 tel.079-662-2865



高野山真言宗高照寺(花の寺)名誉住職

密祐快(みつゆうかい)

青年時代に中南米を放浪。放浪中の2年間、グアテマラのインディオ達と暮らす。帰国後、僧侶として、又現代美術作家として各地で活動。高野山の命を受け、南米開教区総監としてブラジルに赴任し、3年間の任務を終え、帰国。

花とブルース

「花とともにあるウボンの暮らし」



氷点下の能勢町で目覚めたはずが、夕方には気温30度のウボンラチャタニの空港で汗をかきながらソムタムを食べていた。距離にして40000km以上あるタイへも、往復数万円の交通費で、1日もかからず飛んで行ける。

ウボンがある東北のイサーン地方は、私がタイ野菜を出荷している料理屋で働くコックさんの出身地。一度行ってみたいと思っていたが、たまたま現地で教育支援をされていたMさん(84歳)が、ウボンの農家に滞在していることを知り、私も3泊だけお邪魔することにした。

ウボンの朝はとても早い。ニワトリが日の出前から鳴き始め、家のお母さんがカオニャオ(餅米)を蒸し始める。7時頃にはお坊さんたちが托鉢に回ってくるので、

カオニャオやお菓子を差し出し、お経を唱えてもらう。お坊さんが立ち去ると、近所の井戸端会議が行われる。

村には熱帯の花がそこかしこに咲いていた。蝶のような紫色の花が咲くアンチャンは、朝顔的な位置付けだろう。樹木にはバンダ(大型の美しい蘭)がそれとなくくっついていて、花壇にはポインセチアが地植えされている。花に気をとられていると、放し飼いの犬に囲まれた。花の多様性とは違って変わり、この町の犬は白いヨークシャテリアとラブラドルと、それらが交雑した雑種しかない。

「昔の日本みたいでしょ？」とMさんが言う。確かに戦後間もない日本の農村のようだ。

ウボンの農業を見てみたい、と言うと、Mさんの教え子のソム(蜜柑。タイ人は本名が長いのでニックネームで呼び合うようだ)という女性が、車を出してくれた。到着したのは菊畑。小菊やスプレー菊はもちろん、大菊もある。LEDやシェードで開花時期を調整するなど日本の産地さながらだが、どうも雰囲気が違う。菊を摘んだり、家族で写真を撮影したりしているのだ。

花畑を上から見るための櫓まである。菊が仏花として扱われがちな日本にはない発想だが、ここは菊の観光農園だった。菊は、タイでは清々しい芳香を持つ美しい花として贈り物にもするそうだ。ソムが

「スワイ(美しい)」と呟く。花が持つ意味合いが強くなることで失われる感受性もある。

余談だが、サントリーが開発した「青花の菊」には、アンチャンの青色遺伝子が用いられているそうだ。タイと日本は意外なところで繋がっている。

Mさんが「お葬式に行きますが一緒に行きますか？」と声をかけてくれた。教え子のお母さんが亡くなったらしい。「写真も撮っていますよ」と、Mさんが耳打ちした。寺院にはすでに200人以上の人が集まっていた。小さな葬儀だと聞いていたが、いつもこのくらいは集まるらしい。



棺には高齢の女性が眠っており、それを囲んだ人たちがココナッツを割り、滲み出した水をご遺体にかけている。「お清め」なのだろう。

葬儀が始まると、お坊さんがメロディアスなお経を唱える。お経が終わると、関係者が櫓に登って(棟上げ式で餅をまくように)「造花」をばら撒き、参加者はそれをキャッキヤと拾い集める。造花にはお菓子が包まれていた。

最後には各々が遺影に集まって、にこやかに集合写真を撮る。遺影は故人の若かりし頃の写真で、美しい花で装飾されている。タイの葬儀は明るく、賑やかだ。

Mさんは、お母さんを亡くした生徒に向かって、言葉をかけ、大粒の涙をぼろっと流して、静かに合掌した。女性もそれに返す。高齢ということもあり「タイでの滞在はこれで最後かもしれません」とMさんが言っていたのを思い出した。もう会えないかもしれないのか…。

手と手をピツタリと合わせきらないタイ式の合掌は、ほころんだ蕾のようだった。

伊藤 雄大 (いとう ゆうだい)

1985年生まれ。大阪府能勢町在住。東京での農業系出版社勤務をへて、能勢町で植木屋に就職。現在は、農業・農家取材・植木屋の3足の草鞋で生きている。

instagram@yudai_itou



音楽室だより



「音楽の話、連載で書いてくれない？」音楽仲間Mさんからこの「わだち」をピシッと机に置かれたほんの二日前、とある知り合いの新聞記者（こちらMさん）に「コラム書きたいです」と言って軽くスルーされた。私は、ふたつ返事で「か、か、書きます書きます書かせてください」と即答しましたが、さて、音楽の話って何を書くのだろう。帰りにそっと差し出された高級梅干しの個包装を開けながら、この梅干しを食べたら必ず書くのだなとドキドキしながらはじめてみます、音楽室だより。

音楽を生業としてるので音楽の話依頼されるのは極めて正しく、初回なので自己紹介を兼ねて現在の自分の活動を並べてみるとクラシックとその他ジャンルのピアニスト、ピアノの先生、コーラスの指揮者、各種伴奏者、ボーカリスト、あげくボサノバとファンク系バンド2つをやっているという、全国的にみてもかなり節操のない活動。4歳児から80歳以上の方まで日常的に音楽を通してお付き合いがあり、プロ、アマチュア問わず色々な方と音楽を楽しんだり苦悩したりを共有しているわけですが、音楽が生業だからこそ音楽をテーマに文章を書くことを極力避けてきました。くだらない話をSNSに書くのを身上としている私

としては、え？どうしたの？な勢いでシリアスになりそうで。私は何をMさんから求められているのでしょうか。

しかし真面目な私はなんとか「くだらなさ」と「気軽さ」と「音楽」が共存する世界を確立しなければなりません。梅干しに誓って。

さて、今回はこんなテーマ。
「日常と音楽について。」

音楽との関わり方は本当に人それぞれです。小学校の先生に音痴だと言われて（今なら考えられない話ですが）以来音楽なんて大嫌いな方から、毎週日曜の夜にはN響アワーを録画して10年分保存しています、という方も、ってまだそんな方は知らないですけど。

その個人的な音楽とのお付き合いの歴史とは別に、半強制的に日常にある音楽がBGM。バックグラウンドミュージックという割には、主張の仕方はそれぞれで、かなり生活を知らぬ間に操られているのではないかと以前からひっそり考えています。BGM陰謀説。スーパーでふと気づくと買物する歩調と音楽がぴったり合っていたり、ポイント2倍の歌を口ずさんでいたり、さかなを食べないと頭がよくならないわよ！とお孫さんに口走ってしまったり。

日本はなぜこんなに、どこに行っても常に音楽が流れているんでしょう。音楽がないと間違えた空間みたいになってしまう。

道を歩いていたら鳥が鳴いていたり、木々がさわわしていたり、そういうところにも音楽があるかもしれない。包丁で玉ねぎのみじん切りをする時のリズムとか。そういう音を一度音楽だと思って聴いてみてください。驚くほど世界は優しい音楽で満ち溢れています。

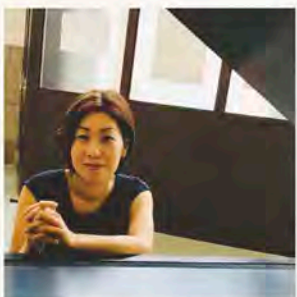
操られていると言えば、ラジオ体操は本当にすごいです。音楽が鳴れば身体が勝手に動いてしまう。少し前に流行った「パプリカ」を聞いたら幼稚園児がつい踊ってしまった、というのを、幼稚園で演奏した時目の当たりにしてびっくりしましたが、なんてったってラジオ体操は全世代型ですから。

去年の夏、子供会のラジオ体操で、なぜかラジオカセ（今はこう呼ばないのかしら）が全く反応せず、集まった人が全員無音のままラジオ体操をするということがありました。それはそれはバラバラで、音楽がないと次の体操もあやふや。途中で歌ってみようかと思いましたがそんな勇氣もなく、肅々と哀しみに満ちたラジオ無し体操が忘れられませんか。新しい朝が来た感じはまるでしない。

結局音楽に操られたのか、そうでないのか、どっちなんでしょう。

中嶋 由紀 (なかじま ゆき)

ピアニスト。豊岡市在住。地域密着型ミュージシャンとして様々な活動をしている。一般社団法人ワンノート豊岡を立ち上げ、代表理事として地域のコンサートなども企画。三月より事務所兼喫茶店でコーヒーも淹れている。



おしえて！戌亥先生

Q ニュースで「骨葬」という言葉を初めて聞きました。どんなお葬儀なのですか？

A 骨葬とは、お通夜の前後にあらかじめ火葬を済ませ、遺体ではなく遺骨を対象に供養を行うお葬儀の形です。

新型コロナウイルス禍の中での「骨葬」

形式の一つとしての「骨葬」

安倍首相が「緊急事態宣言」を七都府県に出してから、新型コロナウイルスの感染が大都市を始め、全国に広がっています。(その後全国に緊急事態宣言発令、さらに延長されました。)その間に、タレントや女優などの有名人が亡くなった、スポーツ選手が感染したりと大変な騒ぎになり、今もその状況が続いています。

東京や関西地方では殆ど見られませんが、東北全域、長野県、関東の一部、北海道・山梨・鳥取・九州・沖縄(何れも一部地域)で「骨葬」が行われています。午前中に出棺して火葬に付し、午後には骨葬・告別式を行い、菩提寺に行き納骨。というのが一般的な流れになります。これらの地方では、このやり方を「骨葬」とは言いません。これが

特に志村けんさんの葬儀の実態が、テレビや新聞で報じられ、大きな衝撃とともに新型コロナウイルスの恐ろしさをより身近に感じさせました。「死後、顔が見られなかった。」「お通夜もお葬儀も無かった。」「遺骨だけを渡された。」「なぜ、お葬儀が出来なかったのか。なぜ、お顔が見られなかったのでしょうか？」

神戸市予防衛生課から各葬儀社に次のような指示がありました。

「新型コロナウイルス感染症で亡くなられたご遺体については、非透過性納体袋に密閉し、納体袋を消毒する。遺族へは納体袋を開けない事、保健所が認める場所以外への遺体の移動は禁止。」
「新型コロナウイルス感染症のご遺体は、他の人に二次感染をしないようにとの配慮から、厳しい管理を求められています。ですから志村けんさんのような処置が取られたのだと思います。」「新型コロナウイルス感染者」の葬儀は、全国の例をみますと、殆どが直葬(火葬)で、後ほど遺骨での葬儀式(告別式)をされています。

※コロナ以前から、旧法定伝染病感染者にも許可証を得て、直ちに火葬の処置が取られていました。

生命に危険を及ぼす指定感染症(コレラ・腸チフス・赤痢・ペスト・日本脳炎・しょうこう熱等々)がこれに当たります。

当たり前なので一般に「葬儀」と呼んでいます。

「骨葬」は、日本従来の「土葬」から「火葬」に変化した時点で発生したと考えられます。多くの地域は「火葬」を「土葬」の変わりと考えたのに対して「骨葬」地域は、葬儀の最終局面を墓地への納骨とみる考えから、火葬を葬儀に先行させたと考えられています。また、その地域で古くから信仰されている宗派のしきたりや、農家の多い地方では、忙しい農繁期を避けて、雪深い地域では、冬季を避け雪解けを待って、遠洋漁業の盛んな地方でも同様に、船員が帰宅するまで待って。また、気温が高い地域では、遺体の傷み等の、公衆衛生の見地から先に火葬を行うなど、歴史的な事情に由来するといわれています。前述の感染者のお葬儀は火葬が先になりますので、必然的に「骨」のお葬儀になります。更に特別な事情がある場合、例えば遺体が安置できない場合(遺体の状態)、遠くで亡くなって「遺骨」で連れて帰る場合、また、お別れの会などは「骨葬」の形式になります。いずれにせよ、故人と最後の対面ができなかった遺族は、なかなか心の整理がつけられないものではないでしょう。だからこそ、お葬儀はきちんと行ってほしいと思います。お葬儀こそが、遺族の後悔や悲しみを癒やしてくれる唯一の手段なのです。

冠婚葬祭コンサルタント

戌亥 正三郎

関西テレビ・毎日放送でもお馴染み、業界第一線で活躍中の冠婚葬祭アドバイザー。終活セミナー、エンディングノートの講師で日本中を駆け回る超多忙な毎日。また、日本のしきたりや食育の講演も多く、全国のセレモニーホールで新人研修にもあたる八面六臂の活躍ぶり。2009年より弊社顧問。

